

大隈言道自筆資料 『自詠集中抄』

— 言道門下小林重治家集 — (三)

進藤康子

前回に続き、江戸時代後期に活動した福岡の歌人大隈言道の自筆資料を紹介する。

— 言道歌壇の中心人物のひとり、飯塚の小林重治の歌集を、師である大隈言道が添削し、添削を加えた後、清書したものである。翻刻に於ける凡例は、初回（第十巻第一号）を参照のこと。

五色のうたのうち 黄

136 てにもたるみちのく山のかねはな  
こゝろの風にちりみちらすみ

137 庭のおもはこのは吹ためこのころは  
こす糸によわる風のおとかな

138 いつこよりしほはみちきてひるならむ

あやしきものはおほかみのほら  
か

龍 「(19・オ)

139 おほそらにのほると誰かいひそめし  
くもはかりこそたつと見えしか

140 よの中になはかりたつをうつし糸の  
外にすかたを見し人やある

141 月かけのこゝろの水にすみぬれは  
にこりもやかてひかりさす也  
「(19・ウ)

142 いはくゝる水のとたえてこほりたる  
うへをなかるゝ月のかけかな

143 よあらしはいたくな咲そちとりさへ  
よこきりかねてこ糸むせふ也

144 いましはしあさひなてりそまちくし  
はつゆきふれりにはのこす糸に

- 145 常はさはそれとこゝろにかゝらねと  
ゆきに見にくきまとの蛛糸 「(20・オ)
- 146 あけぬまにはるやきぬると人こゝろ  
まつおとろかすには鳥のこゑ
- 147 わかみつをくむ井のものいと柳  
めにかゝりきぬはるのはつかせ
- 148 よはなへてうれしかほなるはつはなを  
いまたはゑまぬ軒のうめかな
- 149 わらはへのうゑにしうめもことじより  
ひとつふたつはさきそめにけり 「(20・ウ)
- 150 こゝろなきわれをうらむなうめの花  
さしもさかすはさくもをらめや
- 151 うくいすはひとくとなけとたれもこす  
ひとりさひしきはるさめの空
- 152 はるさめのふるいのしたにたえかねて  
もえいてにけり野へのわかき

- 153 垣こえしかたえのうめの花さかり  
今はとなりのものならなくに 「(21・オ)
- 154 まつにのみなれかほになくうくひすも  
まれにはうめになとかうつらぬ
- 155 おとたてゝよりくる波もなれぬらん  
すさきの鷺も立もさわかず
- 156 となりたになき山さとの垣ほにて  
あさるくたかけきつにはまれな
- 157 ゑをもとめ友よふかけのこゑきけは  
おのれ獨はむさほら<sup>の</sup>しとや<sup>り</sup> 「(21・ウ)
- 158 あるしもわれをおもひてなれぬらん  
手にとるまでにきよる冢鳩
- 159 ゆふかすみかゝるさひしきのへにまた  
もすかなくねをそへてける哉
- 160 ひとりねのとくにさひしくなりぬらん  
やもめかこすみよはになく也

- 161 さきさかぬうめの梢にふるあめは  
うしともおもひうしともおもふ  
「(22・オ)
- 162 わたる人心よらぬはなかりけりはしの  
あなたのをやきのいと
- 163 うしのをおひはなてともわかくさは  
またはむほともなき野なりけり
- 164 わかごとく人もめてきてしきつらむ  
花のこかけにのこるさむしろ
- 165 あをふちにえたうちたるゝさくらかな  
あやふく見えて人におられす<sub>を</sub>
- 166 さく花とおもふとちなるはるのかせ  
ふきたゆむまはたゆみてそちる
- 167 きのふけふこす糸のわかは吹かへし  
なつきかほなる風のさまかな
- 168 花ちりしかたみとおもへはさくらのみ<sub>子</sub>  
あをはの中に見るもなつかし
- 169 ほとゝきすなくこ糸たにももらしかし  
あまりにしけるにはのわかには  
「(22・ウ)
- 170 しけりあふわかにはかけをくたかれて  
このまもりくるなつのよの月
- 171 月かけのいたらぬくまをもとめきて  
こゝろのまゝにとふほたるかな
- 172 てにちかくなりぬとおもへはいくたひも  
ひかりきえつゝとふほたるかな
- 173 月ゆきにまかふと人もいひてしを  
むくらかなかにをしきつの花  
「(23・オ)
- 174 おとまかふのきはのすゝもとりすてよ  
山ほとゝきす今もなくへし
- 175 さみたれにほたるもそらをとひかねて  
しはしやとなる故郷のゝき
- 176 としことになやらふわさをもれいてゝ  
ことしもさけるにはのおにゆり

- 177 たのみある秋はおもへとこのころの  
 てるひのかけのあまりなるかな 「(23・ウ)
- 178 うき友をよそにすくして山守の  
 ちりにましらぬ風にすゝまん
- 179 わかせとの川のなかれにけふもきて  
 たはわさしけるうなぬ子のもと
- 180 ほとゝぎすまつためうゑし橋も  
 こたかたらねはしらてすくらん
- 181 市人なかのさわくそらなるほとゝぎす
- きくひとも なきしに名のりのみして  
 「(24・オ)
- 182 わかやとのさら啼すくるほとゝぎす  
 夕風よりもこゑそすゝしき
- 183 ほとゝぎすなくとてかとに出見れば  
 月のおもふく風はかりして
- 184 すそにこそきてましものをふしはかま  
 をりてもかたにかけてけるかな
- 185 水草のうちにまされる川蓼の  
 からきうきせをわたりかねつゝ  
 「(24・ウ)
- 186 うちまねくおもとを垣にとちられて  
 ほにいてかぬるしのゝをすゝき
- 187 北のまと戸のすきまよりくゝりきて  
 ほね身をさへもとほす秋風
- 188 はつかりのなきこし空をみてしまに  
 ふもとのいち路くれはてにける
- 189 たゝひとり水にやとれる月ながら  
 野にあまりてもちらしぬる哉 「(25・オ)
- 190 ゆふされはもみちのありかわかねとも  
 しかのなくねにそこかとそ見る
- 191 むしのねもなきからしたる秋の夜に  
 時めくものはきぬた也けり
- 192 こまとめてしはしなかむるあしき山  
 あしといふ名は 名たかへそかし いかておふらん

- 193 ぶみめてもこゝるとまらぬやぶれあみ  
みなもこしつゝ行へしられす 「(25・ウ)
- 194 ひのもとむかしもしらて唐国の  
みちぶみ見よし時もありけり
- 195 いろこきはしくれにちりて薄もみち  
まはらにのこる庭そさひしき
- 196 やまさとは夕さひしきこからしに  
くりのみおくる冬はきにけり
- 197 このころのしくれのそらにならへてむ  
てれくもりある人のこゝろは 「(26・オ)
- 198 くるかねのつゝにひなはをとりそへて  
かり人さわく冬の山さと
- 199 神無月日影もとめてほす網なみの  
ひるまなけなるにはのおもかけ
- 200 節あけておとろくかどのはつゆきに  
あとをなつげそつまやちの駒
- 201 よひに寝しふしとやよそにうつすらむ  
しもさゆるよのそらのかりかね 「(26・ウ)
- 202 風もなくゆきふる柳おもしろし  
はるのみとりはものゝかすかは
- 203 のきはよりなたれて雪のおつる日は  
さむさもたゆむこゝちこそすれ
- 204 わかまちしともはとひきて心なき  
人ふみしおくやとのしらゆき
- 205 とくへきほとまちわひてにはの  
きのふのゆきもけふは消けり 「(27・オ)
- 206 ことしけきはすのとしのあき人は  
こゝろそらなる今夜の初雪
- 207 ひとゝせに二度まめを内に外に  
たゝすむおにはあらしとそおもふ
- 208 きのふけふこのめもはるのゆきふりて  
もゝやたゆめるせとのを柳

- 209 すみれさく野にねむまてはおもはねと  
 しはふのうへは立うかりけり 「(27・ウ)
- 210 かすならぬ小草もゝえぬつめやなき  
 なれはかりなるはるとほこるな
- 211 うめのはなをりにきつれとつくひすの  
 なくなるこゑにこゝるまとひぬ
- 212 いとまなき身は鶯のはつこゑを  
 ちりにしうめの梢にそきく
- 213 つきぬへきほとまちなえて心なく  
 花のつほみをつむわらはかな 「(28・オ)
- 214 花もさく無わたるわさもいとまなし  
 いかゝはすへきわかみ一を
- 215 かはなみにかけくたかるゝさくら  
 花まことならねとしつ心なし
- 216 たかこれを一木とさらにおもふへき  
 つしまのさとは花かけにして
- 217 わかやとのあれにし後もさくらはな  
 これはかりには人め見えなむ 「(28・ウ)
- 218 うゑおきしわかきの花のさき初て  
 人にしらるゝやとゝなりにき
- 219 う月とてけふみほとけにそゝくゆは  
 わか身のあかをあらふせけり
- 220 めもはるに麦のほなみにうちましり  
 ゆたけくすめる民の家かな
- 221 ゆたかなる御世そうれしきいとまなき  
 わかよわたりのわさにつけても 「(29・オ)